

1. 地域の概況と屋久島の価値

(1) 屋久島の状況

屋久島は、東京から南西に約 1,000km、鹿児島市からは約 130km 離れた、太平洋と東シナ海の境に浮かぶ面積 500km² の島である。

数百万年前に海底から隆起して生成したといわれるこの島は、標高 1,935m の宮之浦岳を頂点として中央部に 1,800m を超える山岳が集まり、「洋上のアルプス」との異名がある。

琉球弧の北端、北緯 30 度 20 分にそびえ立つ山々に、太平洋の南から黒潮で運ばれてきた温暖多湿の海風がぶつかると、上昇気流となって島を包み込み、大量の雨を降らせる。年間降水量は、山頂部で 10,000mm、平地部でも東京の約 3 倍、4,300mm に達する。

こうした自然の恵みともいえる環境条件が、推定樹齢 7,000 年の縄文杉に代表されるスギの巨木群と、それを包む豊かな森を育ててきた。面積の 90 % をこれら森林が覆う島には、周辺海域を含めて特色ある動植物相が生み出され、亜熱帯性から冷温帯性までの 1,300 種を数える植物の垂直分布を始めとして、種の宝庫が形成されている。

この森によって大量の雨は清らかな水となり、人々の営みと自然とのかかわりを受けとめてきた。

人々は、常は生活に恵みをもたらす時には厳しいこの山々に神の力を感じ、山頂の大岩を神とあがめ、大杉をその化身と信じて畏敬し、そして自然と共に生きる独自の文化を創りあげてきたのである。それはいまだに続いている岳参りに象徴されるように、今日に至るまで自然と積極的にかかわりあうためのきまりとして、島の人々の生き方を支えるものとなっている。林業、農業、漁業というこの島独特の 1 次産業の垂直分布の成立も、このような自然と共生する文化に裏付けられたものとみることができる。

島の周囲は海岸線で 132km、この海岸沿いに少ない平坦地を求めて約 20 の小規模な集落が散在し、1 万人を超える人が住む。昭和 30 年代のピーク時に 24,000 人を数えた人口は、現在 14,000 人、大正初期の水準に戻っている。今日、島の 1 次産業は停滞し、観光など 3 次産業が比重を高めているものの離島の制約を克服できず、若年層の流出、本土都市との所得格差など、他の地方圏と共通する問題をかかえるに至っている。しかし島外に出た人々にとっても、山と水は屋久島のすばらしさの象徴であり、心は島に残っているのである。

(2) 屋久島は世界的な自然遺産

屋久島には日本を代表する自然があり、それは世界的な遺産ということができる。

①日本で一番古く大きなスギをはじめとした巨木群の存在

屋久島は天然杉の南限地であり、しかも島のスギ帯は生態的に九州以北のブナ帯と同位のものでされる。屋久島のスギは、この島の特異な地形、地質条件と気象条件下で発達し、屋久杉と呼ばれる樹齢千年以上の巨木群が生み出された。

その中で最大のものは「縄文杉」と名付けられ、樹齢7,000年を超えるといわれている。縄文杉は標高1,200mの山中に立ち、7,000年を生きた地球上で唯一の生物として、荘厳さと見る者を圧倒する存在感を有している。

スギ以外にもこの島にはモミ、ツガ、ヤマグルマ等の巨木群がまとまってあり、他地域ではみられない原生林が残されている。

②生物相の多様性

屋久島では、海岸線と山頂部の平均気温差が12℃に達し、この0～2,000mの間に亜熱帯性から冷温帯性までの森林が垂直分布している。その植物相の変化は、学術的に高い価値が認められている。また、植物で約1,300種、動物で約300種（チョウ、トンボ以外の昆虫は除く）という多様な生物相が存在している。

屋久島の周辺海域には黒潮が流れ、冬も海水温度20℃に保たれてサンゴ礁が点在し、日本で最も多くの魚種がみられる海域となっている。

これらの生物の中には多数の北限種、南限種や固有種が含まれ、この島は動・植物地理学的にも重要な位置を占めている。

③水（雨）の豊富さ

「月に35日雨が降る」と表現される島の降雨は、山頂部に近づくほど多い。降水日数だけでなく一度に降る雨の量も多く、大量の雨が2,000mの高みから海へと一気にかけ下る。この山と海をつなぐ豊富な水は、140の河川と無数の滝を形成し、変化に富む自然景観をもたらすとともに、生命の島ともいうべき自然を育んできた。

④自然総体としての固有性

一つ一つの要素は相互に関連しあい、屋久島の「世界」をつくり出している。その屋久島の自然生態系全体がたぐい希な存在であり、価値をもつということが出来る。いわば、みなぎる生命の質と量を育んできた、海、山、風、水、植生などを含む環境の総体としての固有性である。

それが人にインスピレーションや感動を与える。すなわち、島の置かれた位置と長い年月を経た自然の連鎖によって現在があること、ここにしか存在しない自然の特殊性を感動とともに人々に理解させる力をもっている。

(3) この自然と共にある人々の暮らし

屋久島の「世界」は、自然の固有性だけでなく、そこに住む人々によってはじめて完結する。黒

潮とそびえ立つ山がつくり出した島の自然は、島に固有の暮らしを生んだ。

① 1次産業の垂直分布

「野に10日、山に10日、海に10日」といわれてきた、農、林、漁業の複合した暮らしによって、島の人々は自然と親しみ、自然を損なうことなく生活の糧を得る術を身につけていた。

それは、つい最近まで、山野に自生する植物を、薬や道具、衣食住、遊びなどに幅広く利用してきたことが記録に残っていることからわかる。

商品経済の発達により、山では島津藩の経営による屋久杉の利用が進み、海産物では鯨節がかつての屋久島の特産品となっていた。黒潮が運んでくる成長しきる前のカツオと、よい水があることがその品質を高めていた。

② 人々の自然認識

島の自然は生活・産業様式だけでなく、人々の意識をも形づくってきた。

例えば人々は、島の山々を前岳と奥岳に分けてとらえる。前岳は村落の前にそびえる急斜面の山で、標高は800m前後、照葉樹林が発達している。前岳は日常的に出かける里山に連続する山であり、また、慣れ親しんだ風景でもある。里ごとにそれぞれの前岳があり、その「里らしさ」に欠かせない条件となっている。

前岳を越えると気温や植物相は急に変化する。前岳の背後にある奥岳は日常目に見えない山であり、足を踏み入れることは少ない。奥岳は自然の恵みの源であるとともに自然の厳しさを体現した聖なる地域であった。

③ 人が海と山をつなぐ

この島に固有の自然のとらえ方を示す例として、岳参りの風習がある。

屋久島では古くから山岳信仰が根づき、島の人々は、春秋の彼岸になると、集落毎に若者を中心とした一団が塩や海藻など海の幸を持って御岳に登山し、シャクナゲの枝を土産に里に帰ってくる。山頂までは2～3日の行程であるので、村人が全員登る訳にはいかない。留守の人々は、村落の前にそびえる前岳まで登って代表の若者たちを出迎えるか、もっと近い詣所という遙拝所に出て迎えるのである。そこで神霊ののったシャクナゲの小枝をもらい、各家の床の間に飾る。

山の神には海の幸を供えて豊漁や安全、一家安穏などを祈る。そして山の霊気がシャクナゲを通じて里にもたらされる。岳参りは海と山の恵みで生かされていることを確認する行事であるとともに、人が自然の一部として、海と山とをつなぐ役割を果たしてきた。

人々はこうして自然から豊かな恵みを受けるとともに、畏敬し、仲間として共に生きてきたのである。

2. 屋久島環境文化村の背景

(1) 求められる「共生と循環」の原理

豊かな水や森に支えられ、生命のみなざる島、屋久島。人々も森の中に組み込まれ、生きとし生けるものと共存する暮らしを成り立たせてきた。屋久島は、森の文化を体現した島である。

①森の文化

森の文化には、都市文明が置き去りにしてきた「共生と循環」の原理が貫かれている。

森の文化の典型は縄文時代にみることができ、縄文文化の形成以来、日本文化の基層には森の文化が生きていた。日本では、近代化以前は、共生と循環の原理を保ちつつ、森を維持し稲作農業を中心とする産業を発展させ、生命豊かな日本列島を引き継いできた。今も総面積の3分の2を占めるほどの森が残っていることがそれを示している。また、日本の宗教や芸術の根底にも共生と循環の原理が宿っている。

森の文化は、生命を謳歌し生命をいとおしむ文化である。鳥が飛び、魚が群れ、花が咲く、このように自然界ではすべてのものが共生し、また、生きとし生けるものは生き代わり死に代わりして永遠の循環を続ける、というのが共生と循環の思想である。

②文明がもたらしたもの

共生と循環の原理をはばむものは、文明の中に存在していたと思われる。世界の歴史をふりかえると、農耕牧畜文明とそれに続く都市文明は、森を破壊し、森を犠牲にすることによって繁栄した。森は巨大な宮殿や都市を築く建設材を供給し、エネルギー源となり、その跡は畑や牧草地となって食糧生産を拡大し、人口を飛躍的に増大させた。森を消費し尽くすことによって文明は栄え、森を破壊しては新しい森を求めて移動した。共生と循環とは裏腹の、自然破壊の歴史である。

しかし産業革命以降の近代科学技術文明による自然の征服は、これとは比べものにならないほど強力であった。この文明は、それまでの人間が考えられないような豊かな生活をもたらした反面、人間活動は巨大化し、自然の秩序全体を破壊するほどの力を持つに至った。地球環境の危機とも呼ばれる、自然破壊の新たな局面である。もはや、基本的な文明のあり方を変えなければ人類は生存さえも危うくなるという時代が到来しつつある。

③共生と循環の原理の再生へ

人間も自然の一部であって、自然の中の他の多くの生きものと共生することでしか生きられず、人間だけが果てしない成長や拡大を続けるということはありません。また、個人の存在や現在という時に絶対の重きを置くのではなく、長い時間の中で考え、今ある自己の人生は無数の循環を続ける人間という生命の一つの経過点にしか過ぎないとみる、そうした視点が必要である。

このような思想の下で、新たな生活文化を創造するとともに、社会システム全体を「共生と循環」型として作り直すことが求められている。

(2) 近代科学技術文明の限界

産業革命以降の科学技術文明の肥大化は、20世紀後半に至って自然と人間活動のバランスを混乱させている。

①科学と技術の自触作用

この文明は、自然に対する正確で緻密な認識の体系である自然科学をもち、その成果を自然に対して適用し、人間が自らの都合によって自然を変えることのできる技術を所有している。科学と技術はたがいに相手の発展を加速しあい、産業化社会の基礎となった。

これによって人間は豊かな物質を生産することが可能となり、自らの生活水準を高め続けてきた。そこには欲望を充たすことを果てしなく追求する人間の本性の一つがあらわれている。科学と技術はその自触作用によって、さらに互いの進歩を促進し合う。そして、今や近代社会は、自然界におけるバランスを失いつつある。

②人間中心の世界観

こうして科学と技術の力を背景に、人間が世界の中心となり、地球上の自然を大きく変化させる一方、科学と技術はますます強大で制御しにくいものとなった。

これが結果的に、大気中の炭酸ガス濃度の増大、オゾン層の破壊、熱帯林の減少、海洋汚染等に代表される地球環境の危機を招くことになった。自然を克服したはずの人間が、自然からの致命的な仕返しを受けつつある。

科学技術文明は人間活動を巨大化しただけでなく、人と自然を切り離し、生物としてのヒトとの意識をも失わせた。環境保全の思想においてさえ、人間環境系という、人間中心の思想と論理によって組み立てられている。

③時代の転換点

一方で、ブラジルサミットが開かれるなど地球環境問題が国際的政治課題になり、国と国との関係だけでなく、地球と人間との関係を見直すことを通じて新しい秩序を模索するという時代を迎えている。「近代をいかに超えるか」は、全世界的に思想的テーマとなりつつある。

日本では、経済成長の結果もたらされた「豊かさ」の内実を改めて問い直すという形で、科学技術の発展に基礎を置く産業化社会の限界が認識されつつある。政府が提起している経済大国から生活大国へという社会目標の転換は、これからの産業のあり方や人々の生活、意識などの新たな展開を予感させる。

(3) 原点としての屋久島

①転換への可能性

科学技術文明の否定的側面に現れているように、人間は、共生と循環とは相反する一面をもつが、反面、その本性において、自然を見て感動したり美しいと思う心をもつということも真実である。また生物として、周辺環境変化を認識して対応しようとする本性をもっている。今日、地球環境の危機と呼べる状況に直面して、多くの人々が環境問題への関心を高め、人間の限りない欲望を制御する必要があることを意識するようになったことがそれを示している。

②共通の意識の拡大へ

このような時代の転換点にあつては、共生と循環の原理の再生へ向けての問いかけを発し続けることが必要である。

そのためには、段階を踏んだ実践、すなわち、具体的素材あるいは地域において「知り（認識）」「考え（計画）」「試みる（事業実施）」ことが重要である。また、このプロセスを通じて情報発信し、「共通の意識」を拡大していくことが、孤立を防ぎ、地域を超えた協同作業を可能にするためにも必要である。

③屋久島の位置

自然と人間とのかかわりに関する「共通の意識」を拡大して行くことは、当然、都市内においても不可欠のことであるが、問いかけのための素材（地域）としては、シンボルとしての説得力、自然の傑出性による力強さ、共生の原型としての社会、あるいはその記憶が必要である。

屋久島には、縄文杉を頂点とする豊かで生命力のあふれる自然があり、シンボルとしての説得力がある。また自然要素が傑出していることによる、現状打破のパワーがある。さらに森の文化と自然とともに生きてきた暮らしの知恵が残されており、共生型社会の原型たり得ている。

④屋久島を日本のシンボルに

自然と人間とのかかわり方が問われ、生活のあり方、文明の原理を変える必要が広く認識される時代を迎え、わが国は、世界に対する貢献のひとつとしても、日本文化の根底にある「共生と循環」の原理を再評価し、地球環境の保全のためにその理想を世界に向けて発信する役割を担うべきである。

屋久島は、森の文化という伝統的な日本の文化の原点なのであり、したがってこれからの日本のあり方を問い、また世界に向けて文明の原理の転換を訴える日本のシンボルともなる位置にあるのである。

3. 屋久島環境文化村とは

(1) 基本的考え方

屋久島では、すぐれた自然が残されているだけでなく、それとかかわってきた人々の暮らしがあり、その生活文化は共生型社会の原型として重要である。一方で地域としては現在、生活や産業を維持する上でいくつもの問題をかかえている。

屋久島での試みは、世界の自然遺産を受け継いで行くだけでなく、同時に地域の人々の生活を支え、あるいは豊かにして行くことが求められている。すなわち、ここで提案すべきものは、自然の保護と生活との対立を乗り越える、新たな地域づくりの試みでなければならない。それは、基本的には、自然及び自然と人とのかかわりに対する認識を深めることを通じて達成される試みである。

①現代社会に対する問いかけを行う

自然の特殊性を認識させる場として屋久島は最適であり、傑出した自然条件を生かし、自然を深く理解することを通して人間と環境とのかかわりを学ぶ場とすべきである。

屋久島での試みは、「共生と循環」の原理に基づく共通意識拡大のための問いかけであり、それには屋久島という地域に即して事業を計画し実施することも含まれる。そしてここで得られた自然とのかかわりに関する認識や、人と自然の共生の原型を未来に向けて組み立て直すという試みは、常に世界に情報発信して行く必要がある。

それは、「共生と循環」という森の文化の原理を日本の国是とし、屋久島をその象徴にするべく、21世紀型社会として屋久島から「森林文化社会」（ここでは屋久島環境文化村）を提案する、ということでもある。

②地域を豊かにする、あるいはその手だてを提供する

この試みは、屋久島の価値の研究や学習を通じた再発見と活用により、屋久島の自然の「学術的価値」と島民の「豊かさ」をつなぐ役割を果たす。ここでいう豊かさには、精神的豊かさはもとより生活環境の豊かさも当然含まれねばならない。

すなわち、地域の生活にとっては、これを通じて地域の問題を解決し、活性化をもたらす手段となり得るものでなければならない。また、それは共生型社会再生への内部からの努力とともに、日本及び世界に対して環境への認識の深化を訴えることを通じて、いわば外とのかかわりを通じて達成される。

このように、現代社会への問いかけと屋久島の地域的課題という2つのテーマを、互いに補完し合う関係にあるものにとらえ、これを統合する試みとして、屋久島環境文化村構想をおくこととする。

(2) 地域づくりとしての環境文化村

環境文化村は、屋久島の自然及びこれと共生してきた地域の生活文化に依拠しながら、自然と共生する社会、エコロジックな地域づくりをめざそうとする思想である。

それは、社会システムを含めた屋久島の全体を、自然と共生する社会あるいは地域に再生し、それによって真の意味の豊かさの実現をめざそうとする試みである。

①環境文化を手がかりに

屋久島という固有の自然環境の中で、歴史的につくり上げられてきた自然と人間のかかわりの過程と結果の総体が、ここでいう「環境文化」である。それはつまり島の人々が、島の自然とかかわり、相互に影響を加え合いながら形成、獲得してきた意識及び生活・生産様式の総体である。この「環境文化」について学習し、研究することのなかに、地域づくりや共生型社会の再生への手がかりが内包されているのである。

②フィールドミュージアムとしての環境文化村

環境文化村計画では、屋久島の自然、生活、生産にかかわる、すべての事象を素材とし、その具体的な素材の意味を認識することから出発する。

そのためのシンボリック事業として「環境学習」事業を位置づける。ここでの環境学習は、素材を傑出した自然だけに限るものではなく、また、環境学習のための場づくり、しくみづくりも、特定の施設内に限定されるものではない。屋久島の山、森、川から海に至るまで、あるいは光や風、音やにおいまで、あらゆる事物事象を素材にし、地域で営まれている生活、生産のすべてを学び、それらを通して自然を学ぶことでなければならない。この意味で島全体がフィールド・ミュージアムとなる。

したがって屋久島における環境学習は、地域の経済や生活と必然的にかかわることになり、島づくりの計画や事業とかかわって、地域づくりに結びつけられることになる。

③環境文化村における環境学習

環境文化村での環境学習は、地域固有の「環境文化」を学習することを通じて、普遍的な自然と人間とのかかわり方を学ぶということである。つまり、外からの人間にとって環境文化村とは、屋久島の「環境文化」を体験することを通して自然を知り、自然との共生の知恵を学ぶ場にほかならない。したがって島の人と共に過ごし、島の自然と生活を体験することこそ意味がある。また環境学習の中身は、見る、知る、体を動かす、感動するなど知覚、身体的体験のすべてによって環境＝自然に対する基本的認識を得ることである。

ここでいう環境学習は、「観光」の本来の姿に通じるものであり、それは屋久島に来て、その自然だけでなく自分自身についてさえ、新たな発見をすることである。また、そのことによって、社会の未来、人の未来の光を観ることにほかならない。

④環境学習から地域づくりへ

地域の人々にとっては、学習の場を提供したり知識やノウハウの提供を行うことが新たな産業を起こすことであり、また、交流等によって社会や経済の活性化につなげることが可能となる。しかし環境文化村のねらいはそれだけでなく、島民自身にも「環境学習」を促すものであり、自然との共生によって得てきた暮らしの豊かさを改めて見直し、地域での生産や生活を新たな未来に向けて組み立て直す契機としようとするものである。

このように屋久島環境文化村は、屋久島という固有の環境の中でつくり上げられてきた自然と人間とのかかわりである「環境文化」を踏まえ、さらに新しい両者の関係を生み出して行く方向で自然環境の保全、活用を図ると同時に、地域社会経済の現在の問題を解決し活性化を促進する計画である。

(3) 地域としての課題

屋久島の現状は、多くの問題を抱えている。

①過疎、ハンディキャップ地域としての問題

隔絶型大規模離島、高標高で地形急峻という屋久島の特性は、近代の産業化社会の中では不利な条件として作用し、地域は「発展」からとり残されてきた。

主要産業であった第1次産業は市場や資源の制約などから停滞し、就業構造は3次産業主体へと転換が進んでいる。しかしどの産業も、経営規模の問題等から付加価値化の遅れがみられ、増大しつつあるサービス、観光業も島内事業者の主導権がとれない状況にある。このため公共事業を中心とする雇用への依存度も大きい。

様々な試みにもかかわらず本土との所得格差は解消されず、むしろ拡大の方向にあり、それとともに若年層の流出の趨勢が続いている。

また、住民の生活意識の多様化に対し、教育や、文化、にぎわい等のいわゆる都市的な魅力の不足が顕在化し（整備面での離島、過疎地の制約）、それが人口の島外流出を加速するもう一つの要因となっている。

②自然保護による制約

森林面積の約8割を国有林が占め、国立公園、原生自然環境保全地域に指定された面積は合わせて全島の約4割、他にも多くの制度が重なり、保護のための制約が、生活・生産活動との軋轢を生んでいる。

とりわけ島の主要産業であった林業は、昭和30年代から40年代初めにかけて国有林において、時の社会情勢を背景にして、木材の増産要請に対応した伐採が行われたが、その後とくに昭和50年以降、自然保護や国土保全への配慮から伐採量が減少し、林業者の就業の場の不足を招いている。農業においては、ポンカン、タンカン農家を中心に、サルによる農作物被害に

悩まされている。

また生活面でのモータリゼーションの進展や、観光サイドからの要請に対し、自然保護の観点から道路整備が制約されるという問題も発生している。

いわば国民的な財産として島の自然環境を守ることが、地域の経済発展や生活利便の向上を妨げる重圧となっている面がある。

③住民自身もたらす環境への負荷

島内でもモータリゼーションの進展、生活様式の都市化は確実に進んでいる。そしてこのことが、人々と自然とのかかわりを疎遠にしつつある。森とのつながりの記録をみても、昭和30年以降、植物利用は自生種の利用が減り、食を中心とする栽培作物が多くなる。目的も遊びや薬としての利用といった野草との日常的なつながりが減り、換金のための採集が増えている。

その一方で、集落の散在で効果的な生活基盤整備が遅れていることも影響し、例えばゴミ問題の発生や生活排水による河川の汚染が問題化している。

④観光による圧力

屋久島の自然の傑出性が広く知られるようになり、高速船の就航もあって、近年急速に入込み客数が増加、年間10万人近くの観光客が訪れるようになった。

滞在は短時間、地域との接触の少ない通過型で、しかも5月と7、8月に集中する。宿泊能力不足や関連産業の未成熟という要因も加わり、地域経済への波及効果が不十分という問題がある。また、利用が偏り、自然に対する負荷が高まりつつあることも問題である。とくに縄文杉登山者が増加して周辺の土砂が流出し、杉の根系が露出するなどの事態となっている。

(4) 環境文化村の役割と機能

屋久島環境文化村は、世界史的な課題に対応しようとする試みであると同時に、上述の屋久島固有の地域課題に対応するものでもなければならぬ。地域問題解決の基本方向は、共生型社会への再生であり、屋久島らしさの確立（それによる付加価値の産出）であり、外部との健全な関係の創出である。

これらを実現するには、すぐれた自然や生態系を保全しつつ、公共民間による支援、とくにボランティアな思想による支援等をバネとして、新しい視点による島づくりの方策を考えていくことが必要である。このような観点から、屋久島環境文化村がそなえるべき要件について考える。

①屋久島の価値の再確認を通じて個性的な地域を創出する

環境文化村は、屋久島の価値の研究や学習を通じた再発見、それに基づく自然空間利用秩序の再生等により、個性的な地域を創出する機能をもたねばならない。地域の個性化は、地域の自立的発展に不可欠な島内の「誇り」を引き出す契機になる一方、島外に対しては例えば産業

面での付加価値化につながり、活性化を進め豊かさを生み出す基盤となる。

②世界に情報発信する

環境文化村の思想は、現代社会における自然と人間とのかかわりのあり方を問うものであり、ここで得られた自然に関する研究成果、環境文化に関する認識や試みは、常に島外に、そして世界にさえ情報発信して行く必要がある。それが地域の個性化と付加価値化にもつながる。

③島民が主人公となる

環境文化村の実現には、島民の誇りに基づく主体性が必要である。島民自身が構想について了解し、環境について考え、試みる主体とならねばならない。島民の主体的なかかわりは、島外者が屋久島の自然や環境文化の研究、学習を進める上で不可欠であると同時に、住民自らの手による地域社会や生活の再生のための前提条件である。

④外と内をつなぐしくみや場を提供する

環境文化村の実現には、資金、知識、情報、技術、マンパワーなど、あらゆる面での島外からの支援が必須である。すなわち、地域の活性化、あるいは地域の自立といいかえても、島内だけで完結することはあり得ず、外とのつながりが欠かせない。また島の人々の暮らし方や感性を来訪者や研究者に伝えることが、それらの人々にとって意味があるのである。環境文化村は、両者を媒介しそれによって島民、島外者の双方を豊かにする役割をもち、そのためのしくみや場を提供して行く必要がある。

⑤100年単位で計画を考える

環境文化村の実現には、生態系への影響を与えないために、科学的に緻密で長期的視点にたった対応が必要である。森林の生育するスピードに合わせた対応を図るための超長期的な目標設定を行うと同時に、かかわる人々の合意形成も含め、バランスを保ちながら目標に向け事業を進めて行く必要がある。

⑥運動としての環境文化村構想

環境文化村構想は地域形成のための新しい試みであり、構想実現へのプロセスとして、運動としての性格をもつ必要がある。すなわち一部の公的主体だけではなく、かかわるすべての主体は、構想への参画、役割分担をするとともに、それを通じた意識とライフスタイルの変革が求められることになる。この意味で環境文化という概念には、過去及び現在にとどまらず、将来の地域の姿に対する意志、すなわち来訪者、島民の環境的意識と行動をつくり出して行くという意志が込められている。

運動としてみた場合、島に住む人々自身の自然や暮らしについての発想転換を促すとともに、都市住民に対しても都会での自然の回復への意識改革を訴えるだけの力をもつことが必要である。